

# こころ

## 耳をすませば

「二人の物語に日本中がまた恋をする」これは、今回実写映画化された「耳をすませば」のキャッチコピーです。

この、「また」の意味は、1995年夏に大ヒットしたアニメーション映画「耳をすませば」（スタジオジブリ）からの「また」です。

27年前のアニメ作品の監督は、新潟県五泉市出身の近藤喜文さんです。近藤さんは、1998年に47歳の若さでこの世を去りました。御存命ならば、宮崎駿さん、高畑勲さんに続く、ジブリのヒットメーカー、そして世界のアニメーションをリードする、世界的な大監督になっていたのではないでしょうか。この映画の大きなテーマは、依存と自我との間で揺れ動きながらも、夢の実現のために一歩踏み出すということです。主人公雫も相手役の聖司も中3の秋、自分を見つめながら、一つの大きな決断をして夢への挑戦を始めます。（このことは、「こころ」14号でもとりあげています）

さて、今回上映中の実写版は、中3の2人をたどりながらも、10年後が舞台。原作の柊あおいさんのマンガにもない新たな物語が紡がれています。中3の時に描いた夢は、10年後どうなっているのでしょうか。皆さんの10年後は？10年後の夢はどうなるでしょう、そんなことを考えながら鑑賞しました。

そして、この作品でもある葛藤が描かれクライマックスへ。中身はネタバレになるので書きませんが、素敵な作品に仕上がっているなど感動。私は、映画を見た後、家にあるアニメ版DVD「耳をすませば」をもう一度見直しました。

実写版は主題歌「翼をください」を杏が、劇中でも雫役の声優さんが歌っています。作品世界にぴったり。アニメ版は「カントリーロード」。これもまた、どんぴしゃの挿入歌。

そういえば、私の元同僚は「これを何度も見ながら、曲を聞きながら挑戦への勇気をもって大学受験の勉強を頑張っていました、懐かしい。」と語っていました。

アニメ版の監督、近藤喜文さんの父親は、自分と同じく喜文さんにも教員になってほしいと願い、容易には彼の生き方を受け入れなかったそうです。一方、高校卒業後、すぐに東京に出て専門学校に入り、アニメーターを目指した喜文さんの旅立ちの日、親戚を招いて送別会をして、そこで彼の絵を披露。それに一同が感服したという逸話もあります。父親の思いの複雑さを感じます。

親としての期待と子の自立。一つのしっかりとした人格として認める親の姿勢が、凜としていて立派です。皆さんも自分の心に耳をすまし、目指したい未来にきっぱりとした決意を持ってほしい。



（カウンセリングルームにある「耳をすませば」の絵コンテ）↑